

“キャプテン” 丹羽教諭、「広報みやま」令和2年2月号（第157号）を飾る

「みやまに生きる人 vol.113」に、本校第2学年主任 丹羽 朋子 先生の本校での活躍ぶりが取り上げられました。第1学年主任、第2学年主任、第3学年主任と、この3名の学年主任の取りまとめ役をお願いしていますので、私は“キャプテン”丹羽先生と呼んで後押しをしています。



みやまに生きる ひと 人 vol.113

教諭 丹羽 朋子さん (44歳)

「小さい頃からなかなか一歩が出ない子だったので、最初の一步を踏み出せない生徒たちの背中を押してあげたいです」

山門高等学校で教職に携わっている丹羽朋子さん。高校時代、国語の先生の授業に憧れ、教師を志した。教育実習の中で、教師として教えるなら「筑後弁を話すふるさとの子がいい」と思い、故郷に戻り教職に就いた。

話す力をつけてほしい

弁論放送部の顧問を務め、生徒たちの『話す力』の育成に励んでいる。中学生のときに弁論に出会い、『人に伝わる話し方』に関心を持ったとのこと。

「将来、生徒たちは書くだけでなく、話

さなければならぬ場面が多くあると思うので、生きる上で最強の武器『言葉』を身に付けてもらいたいです」

まずは話せる場面作りから

『話す力』をつけるため、授業中は生徒間で対話をさせ、考えを共有させる時間を設けている。

「生徒には一歩を踏み出すときに私たちが教師の意見に流れてほしくはないので、授業や地域間での交流を通して、いろいろな人と出会ってほしいです。そして、『話す力』を活かし、対話して、考え方を取り込んでほしいと思っています」

自分の役割は、生徒たちが『話す』ことができる場面を作ることと語る丹羽さん。生徒間の架け橋にもなっている。

山門高校の良さを活かして

「卒業後いきいきと生きている生徒の姿を見ると嬉しいですし、それまでの苦労も忘れてしまいます」

生徒と教師、生徒同士の距離が近く、家族のようなあたたかさがあることが山門高校の良さであるという。これからも笑顔と愛情を持って、生徒の指導にあたる。



にわ ともこ
高田町竹飯の出身。国語科。
瀬高町文庫。

【みやま市にひとこと】

小さい頃から、地域間、世代間のつながりがいいなと思っていました。今も大事なことだと思います。

【好きな言葉】

誠実さの価値を疑うことなかれ